

## 向山 直佑 (Mukoyama Naosuke)

2019～2021 年度奨学生

オックスフォード大学 政治国際関係学部 博士課程

オックスフォード大学政治国際関係学部での博士課程生活も、4 年目に入るところである。世界は新型コロナウイルスによって危機的状況にあり、その影響は各所に及んでいる。私も、イギリスでの感染拡大により、3 月に一時帰国を余儀なくされ、その後 8 月まで、半年近く奈良の実家に滞在していた。8 月からは再びイギリスに戻ってきているが、友人の多くは既にオックスフォードを離れ、新年度も大学の施設の多くが閉鎖されたまま、あるいは厳しい制限のもとでの開館ということになりそうだ。再ロックダウンということになれば、また日本に戻ることも視野に入れなければならない状況である。

新型コロナとそれに伴う一時帰国により、私は半ば強制的に博士論文の執筆に集中せざるを得なくなった。イギリス、マルタ、ハワイなど世界各地で予定されていた学会発表は当然中止となり、シンガポールとブルネイで行う予定だったフィールドワークも延期、できることといえば、実家にこもって博士論文を書き進めることだけだったのである。とはいえ、日本で博論が書き進められるような状況にあったことを、まずは幸いと思わなければなるまい。私がもしまだ資料収集が終わっていない段階であったり、入学したてで授業を受けなければいけない段階であったりしたとしたら、研究を進めることすら困難な状況に追い込まれていただろう。最悪の場合、研究テーマを変えたり、留年したりすることになったかもしれ

ない。「あとは書くだけ」という状況にあったことを喜ぶべきだろう。

2019 年の秋から書き始めた博士論文だが、一時帰国以降ペースが上がり、2020 年 5 月には、全 7 章中 3 章分のドラフトを書き上げ、中間審査に提出することができた。その後も執筆を進めた結果、8 月末までにさらに 2 章を書き上げ、現在 6 章目に取り掛かっているところである。目標では、6 章・7 章のドラフトを 10 月末までに書き上げた上で、11・12 月で全体を見直し、1 月に博士論文を提出する予定でいる。

博士課程の終わりが射程に入ってくるこの時期に、考えなければいけないのが、就職である。私は大学での研究職を目指していて、まずポスドクをヨーロッパかアメリカで 1-3 年やった後、アジア太平洋（日本、シンガポール、オーストラリアなど）で教員の職を得られれば、と考えている。しかしながら、コロナの影響で今年のみならず今後数年間のジョブマーケットは深刻な影響を受ける可能性が高い。9 月は毎年、世界の大学が一斉に教員ポストの募集をかける時期だが、ただでさえ研究職の就職はこの国でも厳しいのに、今年が出る募集の数が、例年と比べて目に見えるほど格段に少ない。

こうした状況下では、まずジョブマーケットが回復するまでの今後数年間をどのようにしのぐかを最優先に考えることが必要になり、またパンデミックの中で「海外にいる」ということについても、慎重に考えるべき必要が生じる。これまでは、海外で研究を

することで、新しい人と出会い、ネットワークを広げることができたわけだが、現在の状況が仮に続くとしたら、大学は完全に再開されず、対面でのイベントなども当分行えないことになる。それによって、ネットワークの機会は激減し、そこには自国の外で危機を耐え忍ぶストレスだけが残ることになる。来年秋までに状況が改善すればよいが、そうでない場合、今後数年間の進路についてもまた考え直す必要が出てくるかもしれない。

なんだか暗い話になってしまったが、世界がパンデミックの下にあるという事実を差し引けば（差し引くには大きすぎるのだが）、私の生活は順調である。研究は概ね良いペースで進んでいるし、就職に関しても、現時点でとりあえず 1 つはポストクのオファーを頂くことができた。私は、自分以外の何ものかによって自分の生き方を規定されるのが何よりも嫌いで、かつ何もしないのが苦手である。博論執筆のペースアップにせよ、就職活動にせよ、常に何か新しいことをして、チャレンジを続けていた性分のようなのである。そうした性格なので、実家にこもっている間に、新しい趣味も始めた。というか、以前から細々とやっていた趣味を、もう少し真剣にやることにした。短歌である。57577 の 31 音で構成される詩の一種である短歌は、百人一首などで知られている「和歌」からは大きく変化を遂げ、現代の言葉と社会に沿った形式になっている。日々起きる様々な出来事や風景、感情や記憶などを、自らの語彙力と発想、レトリックを駆使して定型の形に落とし込む作業は、コロナで退屈な日常に豊かな彩りを与えてくれるとともに、精神の安定にも役立っている。

オックスフォードでの生活も、残り期間

が短くなってきた。街が冬に閉ざされてしまうのと、疫病によって我々が閉じ込められてしまうのと、どちらが先になるかはわからないが、そうなる前に、できるだけ、まだ行ったことのない場所に行き、この街の風景を目に焼き付けておきたいと思う。



写真 1：東大寺大仏殿へと続く道に人っ子一人いないというのは、初めてだ。



写真 2：羽田空港の空っぽの待合室に、「国際線大增便」のポスターが貼られていた

以上